

さまざまな音の擬音語表現について

横井 雅之[†]

Onomatopoeic Representation of Sounds

YOKOI Masayuki[†]

要 旨

音や動作を言葉で表現するには「擬音語・擬態語」を用いることはわが国では万葉の時代から行われ、その種類も豊富である。ここでは、身の回りで発生する音とその擬音語の関係を取り上げた。とくに摩擦により発生する音はあまり感じないようであるが、しっかりと我々の身の周りに深く入り込んでいる。また、官能小説、マンガ等の分野は多くの擬音語が使用されており、効果的な使用方法があることを示した。

キーワード：音，摩擦，擬音語

1. 擬音語およびさまざまな擬音語表現について

日本語で音や動作を言葉で表現するには、「擬音語・擬態語」を用いることが昔からよく言われてきた。例えば雨の降り方も「ザアザア」から「シトシト」まで擬音語を使うと、降っている様子がよく分かる。また、歩き方も「よたよた」から「すたすた」まで擬態語を使うと歩いている様子が目に浮かぶ。最近では「オノマトペ」というフランス語に由来する言葉が「擬音語・擬態語」の代わりによく使われている。日本語は他の言語に比較して「擬音語・擬態語」が豊富であり、「擬音語・擬態語」の辞典まで発行されている。山口による辞典では約2000語⁽¹⁾、小野では約4500語が収録されている⁽²⁾。

余談だが、文部科学省では擬音語は「カタカナ」で、擬態語は「ひらがな」で書く指導をする事になっている。教科書などはこの規則に従っているものと思われる。我々が目にする擬音語も多分カタカナで表記されていると思われる。しかし、上述の辞典はほとんどが「ひらがな」で検索するようになっている。子どもには「ひらがな」で検索するのに慣

[†]大阪産業大学 名誉教授

草稿提出日 10月20日

最終原稿提出日 12月17日

れているからと思われる。

また、英語による擬音語辞典には、全943語中約156語の振動音・摩擦音が示されている。この本には漫画で視覚に訴える特徴がある⁽³⁾。例えば、「squeak」にはネズミの親子が「チューチュー」と言いながら歩く姿や子どもが窓ガラスを「キー キー」とひっかく姿が描かれており、英和辞典のように和訳が詳しく示されている。このようなことから広く外国人にも使ってもらえると思われる。

擬音語は多くの機械の故障診断に多用されており、とくに家庭電化製品では、擬音語だけでなく、人間の声をまねて誰にでもわかるように進化している。また、自動車関係ではEV化が進み、走行性・安全性なども含めて従来のマニュアルが一新されている。例えば、異音がするときに、「こんな音がする時は？」など一般の人にもわかりやすいように事例が掲載されている。さらにシステム作動音としてブザー（音）が示され（ピピピ）や（ピッ）などの発生する音によって車の状態がわかるようになっているものもある⁽⁴⁾。

また、医師による問診についても発生する音を擬音語で表し、その音による診断結果をまとめたものもある⁽⁵⁾。さらに幼児の絵本などには「擬音語」が多く使用されているが、その中身はほとんどが擬音語を「ひらがな」で書いてある^{(6)・(7)}。このように擬音語は日本人にとって古くからのなじみ深い言葉である。

擬音語の多用は一般にはあまり好ましくないとされているが、これは、擬音語が感情をより身近に感じることもあるためと思われる。一般の文学作品では、このような手法は低くみられると思われる。一例として、永田は685冊の官能小説を基にした辞典を著した⁽⁸⁾。このなかでも擬音語を用いた文章が多数あり、著者の言うように擬音語が使用されないと、官能小説においては表現や興味は半減すると思われる。

俳人小林一茶は擬音語を多用している事で有名である。彼の俳句では、「ざぶりざぶりざぶり雨ふる枯野かな」や「風ひやりひやりからだのメ（しま）りかな」など擬音語が掲載されている⁽⁹⁾。また、文献（10）は一茶の俳句から滑稽奇抜な句を抜き出してまとめ上げたものである。この中には当然ながら一茶得意の擬音語が多く抜き出されている⁽¹⁰⁾。

さらに、奈良時代の擬音語については、山口が古事記や万葉集から始まり平安時代、現代まで生き延びた言葉に分類している。ダイナミックな動作音や様子、鈴や玉などの鳴る音などについて、一例として「秋のもみち葉 巻き持てる 小鈴もゆらに たわやめに 我はあれども 引きよりて」小鈴の鳴る音や玉の触れ合う音などを表す擬音語である⁽¹¹⁾。なお、ゆらは擬音語を表している。

また、分野は異なるが、漫画における理解を強調するために擬音語が多く使用され、とくに最近の漫画では従来にもまして新しい擬音語が生まれている⁽¹²⁾。メディア芸術カレ

ントコンテンツとして、3回にわたってマンガ家が描く「目で見る音」を掲載している⁽¹³⁾。藤子不二雄（A）、水島新司、望月三起也、水木しげる、谷岡ヤスジ、江口寿史、高橋留美子、島本和彦、大友克洋、荒木飛呂彦、いがらしみきお、しげの秀一、横山裕一など総勢13名のマンガ家のオノマトペ表現法をこまかく観察している。

筆者は自動車整備実習の故障診断において、擬音語による故障診断を行ってきた⁽¹⁴⁾。擬音語による表現は新たな擬音語を作成し、一般の人にも理解しやすいという、熟練技術が要求されるが、多くの人に理解されやすい。これらの新しい言葉（擬音語）は将来の擬音語教育に関連したものとして有望である。

次章では、音全般についての説明および音の種類でも我々の身近な存在である「摩擦による音」との関連を示す。

2. 音および摩擦音とは

音とは広辞苑第六版によると⁽¹⁵⁾

- ① 物の響きや人・鳥獣の声。物体の振動が空気の振動（音波）として伝わって起こす聴覚の内容。または音波そのものを指す。
- ② おとずれ。たより。音信。風聞。うわさ。
- ③ 応答。返事。
- ④ 発語の最少単位。子音と母音。単音。

と記述されている。

ここでは、①で表された“音は物体が振動する（物がふるえる）ことで発生する”を対象とする。これに基づくと、音の種類および発生形態として、以下の(1)から(3)に大きく分けられる。

- (1) 物体の振動により発生する音：（衝撃音、打音、摩擦音）
弦や棒・板をたたいたり、摩擦したりした場合に発生。
- (2) 空気の流れや物体の急速な移動、急速な空気の流れによる音：（空気音）
木枯らしの音、すきま風の音、竹刀を速く振った時の音、縄跳びの紐を速く廻した時の音、ホイッスルや縦笛・横笛の音など。
- (3) 空気の急速な収縮・膨張や空気が急速に収縮・膨張した場合の圧力変動による音：（空気音）
セーターなどにたまった静電気が放電するときのパチパチという音、雷や拍手の音、風船の割れる音、水滴が水面に落下した時の水音。

上に述べた4種類の音（衝撃音，打音，摩擦音および空気音）のうち，一番身近に感じ，かつ多く使用されている音として，「摩擦」により発生する音（摩擦音）を取り上げた。摩擦音とは一般には物が擦れたり，触れ当たったりした時に発生する音と考えられる。摩擦現象を表す言葉として，

- (1) 摩擦する（まさつする）：物と物とがすれ合うこと。また，こすり合わせること。
- (2) 擦る（こする）：押しつけて摩擦する。押しつけてすり合わせる。
- (3) 擦れる（こすれる）：互いにすれ合う。
- (4) 触る（さわる）：手でふれる。接触する。
- (5) 擦れあう，摩れあう（すれあう）：物と物とが擦れ合う，摩擦する。
- (6) 触れ合う（ふれあう）：互いに触れる。
- (7) 触れる（ふれる）：ちょっとさわる。軽くあたる。

などがあげられる。

摩擦音を擬音語表現した場合，第3章のように多くの現象が我々の身近に見られることが分かった。摩擦音は，いくつかの国語辞書やWebサイトでは，以下のような説明がされている^{(15)～(17)}。

1. 肺からの呼気に対し声門ないし調音器官が閉鎖をつくらぬ程度に狭いせばめをつくることによって生じる音。
2. 調音方法による子音の分類のひとつ。調音器官を接近させて呼気の通路に著しいせばめをつくり，そこを呼気が通過するときに生ずる噪音（そうおん）。「すずめ」の[s]，[z]や，「しじみ」の[ʃ]，[ʒ]など。
3. 肺から口腔を通過して出る呼気が，声門・咽頭・口腔内の調音器官のどこかで狭められて生じる音。[s]，[ʃ]，[z]，[ʒ]などの音。
4. 口腔内の発音器官が狭めを作り，息がそこを通過する際に発せられる子音。[f]，[v]，[s]，[z]など。

上述のように，一般の辞書には摩擦音は音声学の一部として掲載されている。試みにWebサイトで「摩擦音」と検索すると約9割が音声学関連の説明である。

しかし，ここで対象とする摩擦音は，簡単に言うと「物と物が擦れ合って出る音」であり，人間の口腔内での音を対象としない。一般には，

- (1) 「金属」どうし，例えば，電車の車輪とレールの摩擦。
- (2) 「非金属」どうし，例えば，ワイングラスと指の摩擦。
- (3) 「金属」と「非金属」の摩擦により発生する。例えば，自転車のブレーキとブレーキシューの摩擦。

などにより発生する音である。

3. 身の周りに存在する摩擦音の擬音語表現について

摩擦音は前章でも述べたが気がつかないだけで、我々の身の周りには多く存在する。ここでは、その一例として摩擦音の擬音語を日常の起きている現象と重ねて表す。

摩擦音は一般には「鳴き音」と「こすれ音」に大きく分けられる⁽¹⁸⁾。「鳴き音」は正弦波に近い、比較的するどい音をしている。擬音語で表すと、「キーン」とか「ギー」という比較的単純な音である。「こすれ音」は「鳴き音」以外の音を指す。例えば物がふれあって出す音「ガタガタ」, 「リンリン」などである。

本報告では、普段何気なく使用している摩擦による音およびその擬音語表現について取り上げた。身の回りに存在する摩擦音を取り上げてみると以下のような現象が目に見え、下線がついて、ゴシック体で表現してあるのが「擬音語」である。

A君は大学生で家から最寄りの駅まで自転車で通学している。朝、玄関のドアを開けるとギーという音がした。ドアの金具が油切れしているのだろうか、今日の日曜日にチェックしなければと思いながら自転車に乗る。駅へ行く途中は下り坂なのでブレーキをかけると他の自転車やバイクのキーという甲高い音が聞こえる。

駅では電車がホームに入ってくると、キーというブレーキ音を発生して止まる。混雑した電車に乗り込み、カーブにかかると車輪とレールの間のキーという甲高いきしり音が聞こえ、体が外側に持っていかれそうになり、あわてて、つり手にしがみつくと、つり手とパイプの間からギーギーというきしり音が聞こえる。

今日はナイロン地のジャケットを着ているが、歩くたびに袖と本体がこすれ合ってキュキュという衣擦れに似た音がする。大学の講義室に入ると、教員が黒板にチョークで文字を書いたときにキーという耳障りな甲高い音がした。この音は不快な音の上位を占めているらしい。

家に帰ると、姉がアロマセラピーの店に立ち寄った話をしている。なんでもチベットの方から伝わってきたもので、仏壇の「おりん」に似たシンキングボウルの円周を木の棒でこすると、ブオーンという低い音が発生し、これが精神安定に良いとのことらしい。

試しに家の仏壇にある「おりん」をりん棒でたたかずに「おりん」の周囲をこすると、ブオーンという低い音が鳴り始めた。りん棒をぐるぐる回していくと音がだんだん大きくなってきた。母がとんできて「何を罰当たりなことをしているのか」と叱られた。

夜の食卓では、ワイングラスにワインがなみなみと注がれ、父がこれを知っているかと言って、グラスの縁を濡れた指で何回かこすると、キーンという甲高い音が発生した。

夕食後に使用した皿の汚れを洗剤で洗い流す。洗った皿をふきんでこすると、きれいに洗えた時には、キュッキュッと音がする。この音を売り物にしているCMもあるらしい。

お風呂に入ると、風呂場の床に敷かれたマットと濡れた足が摩擦して、キュウという音を出す。さらに浴槽に体を沈めると、足が浴槽と触れ合ってキュウという音を出す。開け放した窓からは、樹々の葉が風にソヨソヨとそよぐ葉擦れの音が聞こえる。また、コオロギが羽根をすり合わせてリーリーと鳴き音を立てている。

母と妹は寝る前に自分の手にハンドクリームを塗り、スリスリとこすり合わせている。心なしか妹の方が母よりも柔らかい音を出しているように思われる。

このように摩擦音は普段はあまり気にしていないが、我々の身の回りの生活の中に深く入り込んでいる。

4. まとめ

我々が身近で聴く音の種類及び発生形態としては、2章で示すように「摩擦現象」により発生する音が多数を占める。その実際例を3章に示した。

- (1) 音の発生原因は大部分が摩擦によるものであることから、摩擦音の擬音語表示は広く我々の身近に存在していることがわかった。また、摩擦音だけではなく、種々の原因により発生する擬音語も広く使われている。
- (2) 擬音語を実際に適用する場合、機械の故障診断への適用など、今後さらなる領域において使用が増大することが予測される。とくに、日本人にはなじみ深い用語など新しい擬音語表現が更に出現するのではないかと思われる。
- (3) マンガは「目が見える音」(視覚から受ける音感覚)への移行が更に進むと思われる。これが擬音語・擬態語の新たな発展へつながると思われる。

参考文献

- (1) 山口仲美編, 暮らしのことは擬音・擬態語辞典, 講談社, 2003.
- (2) 小野正弘編, 日本語オノマトペ辞典, 小学館, 2007.
- (3) リーダーズ英和辞典編集部編, 漫画で楽しむ英語擬音語辞典, 研究社, 1985.
- (4) SUBARU XV取扱説明書, p.489, 株式会社SUBARU, 2020.
- (5) 田村康二, 五感で診るコツ, 金原出版, 2006.

- (6) 高野紀子, オノマトベのえほん, あすなろ書房, 2020.
- (7) 小野正弘, イラストでわかるオノマトベじてん, 成美堂出版, 2021.
- (8) 永田守弘編, オノマトベは面白い 官能小説の擬声語・擬態語辞典, 河出i文庫, 河出書房新社, 2012.
- (9) 小林一茶, 一茶俳句集, 岩波文庫, 岩波書店, 2002.
- (10) 半藤一利, 一茶俳句と遊ぶ, PHP新書, PHP研究所, 1999.
- (11) 山口仲美, 奈良時代の擬音語・擬態語, 明治大学国際日本学研究, 4巻1号, pp.1-20, 2012.
- (12) 井澤小枝子, 漫画におけるオノマトベの表現力, 東京女子大学言語文化研究, 26巻, pp.41-47, 2017.
- (13) <https://macc.bunka.go.jp/> (参照日2023年5月21日)
- (14) 横井雅之, 自動車整備士養成における擬音語を用いた故障診断教育, 大阪産業大学論集, 自然科学編, 129号, pp.1-17, 2018.
- (15) 新村出編, 広辞苑 第六版, 岩波書店, 2008.
- (16) 北原保雄編, 明鏡国語辞典, 大修館書店, 2003.
- (17) 摩擦音Wikipedia (参照日2023年9月10日)
- (18) 横井雅之, 中井幹雄, 摩擦音の発生機構に関する研究 (第1報, こすれ音と鳴き音の発生機構), 日本機械学会論文集C編, 45巻, 391号, pp.346-355, 1979.